

## 十人のおとめのたとえ

マタイ25章1～13節  
2022年3月20日  
松田 基子 師

受難節の第三主日を迎えました。イエス様は、人類の罪を贖うために、愈々(いよいよ)十字架に架からなければならない、その時が迫っている事を悟っておられました。イエス様は、十字架が、どれ程の苦しみかを、考えられたでしょう。しかし、イエス様はその苦しみだけに、心が捕らわれておられた訳ではありませんでした。その先に目を向けておられました。

マタイ20章17節～19節に、  
「イエスはエルサレムへ上っていく途中、  
12人の弟子だけを呼び寄せて言われた。  
『今、わたしはエルサレムへ上って行く。  
人の子は、祭司長たちや律法学者たちに  
引き渡される。彼らは死刑を宣告して、  
異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、  
鞭打ち、十字架につけるためである。  
そして、人の子は3日目に復活する』  
とあります。

イエス様は、十字架の苦しみを苦しんだ後、必ず復活する事を確信しておられました。イエス様の復活は、神様が、イエス様による人類の罪の贖いが完了した、その事を証明されるものです。イエス様は人類の救いを完成されたならば、父なる神様の御許、永遠の世界、天の国に昇天され、神様の右の座に着座されるのです。イエス様の目は、十字架の苦しみの彼方に復活して、天の国の神様の右の座、着座されるところに注がれていました。

イエス様は、天の国に帰られたならば、ご自身だけがその恵に浸って、地上の弟子たちを見放されるわけではありません。イエス様は、ご自身が天に帰られたならば、聖霊を地上に送り、弟子たちに聖霊による助けをお与えになります。そして、やがての日、それは神様がお決めになる時ですが、世界を裁き、終結させ、神の国をもたらす為に、再臨されるのです。

イエス様の願いは、弟子たちが生涯を賭けて、ご自身が再臨されるその時まで、イエス様に信頼して信仰を守り抜き、イエス様と共に天の国で過ごすことが出来るようになる事でした。

そのために必要な事として、イエス様は弟子たちに、マタイ24章13節で、

「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」

と言われ、その事の大切さを、いくつかの譬えを用いて教えられました。その一つとして、マタイ25章1節に、イエス様は、

「天の国は次のようにたとえられる」

と、話し始められました。譬え話は、

「十人のおとめが、それぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く」

とあります。ここで、天の国は結婚式に譬えられています。結婚式は、結婚する花婿、花嫁も、招待された祝いの客も皆、最高の幸せに満たされる時です。

『天の国が、結婚式の宴席に譬えられる事は、天の国は喜びに満ちている』  
と云うことです。

そこに入るための譬えです。おとめたちが、一つの役割のために、その結婚式に招待されました。ところが、2節を見ますと、

「その内の5人は愚かで、5人は賢かった」

とあります。どの様なことで、賢さと愚かさが分かれるのでしょうか。3節に、

「愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿が来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった」

とあります。

彼女達の結婚式での役割は一体、何だったのでしょか。イエス様の時代のユダヤ人の結婚式は、どの様なものだったのでしょか。挙式は、当日の夕方、花婿は盛装して友人に取り囲まれながら、花嫁の家に迎えに行きます。花嫁も盛装して、華麗な装身具で身を飾り、顔覆いをして、彼女の友達に取り巻かれ、付き添われて花婿の実家へと向かいます。行列は花

婿と彼の友達を先頭にし、ともし火を灯して、道を照らし、男子または女子が、行列の前で剣舞を舞い、新郎新婦への歌が歌われます。花婿の実家では、この行列の到着を待ち受けていますが、それは夜遅くなる事があるのです。

イエス様の譬え話は、婚礼の行列が、夜も大層遅くなったのでした。6節を見ますと、

「真夜中に、  
『花婿だ、迎えに出なさい』  
と叫ぶ声がした。  
そこで、おとめたちは、皆起きて、  
それぞれのともし火を整えた」

とあります。彼女たちの務めは、行列を迎えに出て、足元に灯りを灯して祝宴の席に招き入れ、花嫁の世話をして結婚式を盛り上げ、共に楽しむことでした。

この時のランプと言うのは、手の平に入るような小さなもので、油を足して行かなければ、火は消えてしまいます。ここに大変な事が起こりました。8節から見えていきますと、

「愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに  
言った。  
『油を分けてください。わたしたちの  
ともし火は消えそうです。』  
賢いおとめたちは答えた。  
『分けてあげるほどはありません。  
それより、店に行って、自分の分を  
買ってきなさい』

とあります。

真夜中と言うのに、コンビニの時代でも無く、賢いおとめたちの答えには、冷たさを感じますが、もっと深い意味がありそうです。譬え話は、全てが現実に即している訳ではありません。真理を悟らせる為に、自由に組み立てられています。10節を見ますと、

「愚かなおとめたちが、買いに行っている  
間に、花婿が到着して、(花嫁も当然到着  
して居るのですが、花婿に焦点が当てられ  
ていますので、花嫁は、敢えて記されて  
いません)用意の出来ている5人は、花婿と  
一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた」  
「その後で、ほかのおとめたちも来て、

『御主人様、御主人様、開けてください』  
と言った。しかし主人は、  
『はっきり言っておく、わたしはお前たちを  
知らない』  
と答えた」

とあります。

とても冷たい返事ですが、イエス様はこの譬えで、何を教えられたのでしょうか。最初に、天の国の譬えだと言われました。そこで、10節の、

「戸が閉められた」  
と言うのは、

『天国の戸が閉められた』  
と言うことが分かります。この譬えは、  
『そこに、入れなかった人々がいる』  
と言う事に対して、注意が呼び掛けられています。

イエス様は、十字架の苦しみの彼方に、天の国へ帰られ、やがてまた、神様がお決めになるときに、地上に再臨し、弟子たちを初め、イエス・キリストを信じ、信仰を全うした人々と共に、天の国の祝宴を共にする事を思い描いておられます。しかし、イエス様が、天に帰られて後に、弟子たちや、イエス・キリストを信じる人々は、

『イエス・キリストの救いを妨害するサタンの働きで、困難や誘惑に晒される』  
のです。その様な世界を生きて行かなければなりません。イエス様の再臨まで、信仰を守り抜いて、天の国の祝宴に、皆が連なってくれる事が、イエス様の願いですが、皆がそうなるとは限りません。

弟子たちや、ご自身を信じる人々はどうしたら天の国の宴席に、連なる事が出来るのでしょうか。そのためには、何が必要かをイエス様は教えて下さっています。この譬えは

『キリスト信者といえども、天の国に入れない人々がいる』

と言うことを教えています。キリスト者は皆、イエス・キリストを信じた時は、信仰の喜びに満たされ、信仰の火は燃えています。特に初代教会の人々は、イエス・キリストの復活、昇天を目の当

たりにして、イエス様に対する絶対的な信頼と、イエス様の再臨の約束に、

『イエス様は、今日来られるのか、  
明日来られるのか』

と緊張して待っていました。しかし、再臨はなかなか起こりませんでした。

譬え話のなかの花婿は再臨されるイエス・キリストを表しています。花婿の到着が遅れて居るのは、再臨の遅れを表しています。

『本当にイエス様は、再臨されるのだろうか』との疑いが起こりました。また、テサロニケ第Ⅱの手紙2章2節には、

「**霊や言葉によって、あるいは、わたしたちから書き送られたと言う手紙によって、主の日は既に来てしまったかのように言う者がいても、すぐに動揺して分別を無くしたり、慌てふためいたりしないでほしい**」

とパウロは言っています。

この様に、イエス・キリストの再臨が、自分たちの思うように起こらない事への、不安やいらだちで、信仰が動揺し、信仰を捨てる人も出てきました。イエス・キリストの再臨の遅れによって、10人のおとめが待ち疲れて、皆眠ってしまったように、信仰は必ず眠りに襲われます。人は皆疲れて眠ります。疲れない人生なんてありません。この世の富を求めて疲れる人、仕事に疲れる人、人間関係に疲れる人、思い患いに疲れる人、悩みに疲れる人、次から次に試練に見舞われて疲れる人、生きて行く中で、疲れない人は居ません。様々な事で疲れ、心が眠ってしまうことは、全ての人に共通することです。しかし、大事な事は、**自分の心の目の視点をどこに置いて眠っているか**です。

信仰者であっても、心が疲れて眠りますが、心の目を、イエス・キリストの再臨に向けているのか、目の前の、この地上の物に、心奪われて眠るのかで、目覚めてからの生き方は全く変わって来ます。人間にとっては真夜中、つまり、予測不能な時に、イエス様の再臨は、人間には全く知らされることなく、突然起こるのです。

「**花婿だ。迎えに出なさい**」

の声に、主の再臨は、全ての人の心の目を覚ま

させます。イエス様が再臨される時は、マタイ24章27節に、

「**稲妻が東から西へひらめき渡るように、  
人の子も来るからである**」

とある通り、誰もがイエス・キリストの再臨を目の当たりにします。

おとめたちは皆起きて、それぞれの灯を整えました。信仰が呼び覚まされました。見せかけのキリスト者も、

『ああやはり、イエス様の再臨の事は、本当だったのだ。どうしよう』  
とろたえてしまいます。

『そうだあの信仰深いAさんに頼もう』  
と思つてAさんの所へ行くと、Aさんは、目を天に向けて落ち着いて祈っています。

『Aさんお願いします。わたしと一緒にイエス様の前に立って下さい。私の不信仰を執り成してください。』

私にあなたの信仰を分けて下さい』  
と頼むのです。でも、Aは言います。

『信仰は分けることが出来ません。』

私も聖霊に寄り縋る(すがる)だけです。

あなたも、今から聖霊を求めなさい』

とAさんは言うでしょう。

愚かなおとめたちはやっと、自分の不信仰を認め、聖霊を求めるでしょう。しかし、もう、イエス様による宴会は始まっています。困難や試練の中、心が疲れ、眠りながらも、イエス様に対する**信頼と、信仰を持ち続けたキリスト者、やがてかならずイエス様と共に、天国の宴席に連なるとの約束を信じ抜いて来た人々**に対して、イエス様は喜んでその人たちを、天の御国に招き入れ、**宴席に座らせて下さる**のです。

その様に聖霊に生かされて、イエス様と聖霊によって結ばれている人々が、天の国の宴席に着席し終わると、天の国の戸は、閉められてしまいます。愚かなおとめたちに、表される人々と言うのは、一度はイエス・キリストを信じ、イエス様の再臨の約束を教えられながら、それを**信じ抜くことが出来なかった人々**、それは、この世の富や、快樂など、この世の魅力に心を奪われ、心の目がこの世に向いていた見せかけの

キリスト者達です。

祈っても、信仰生活に励んでも、いっこうに問題は解決しないと言って、神様を疑う心になってしまった人々など、心の目、信仰の目は、既にイエス様から離れて、この世の生き方になってしまっていたのです。そこにイエス様は約束通り再臨なさるのです。彼らはその時、

『やはり、そうだったのか』

と慌てて、信仰を取り戻そうとしても、もう遅いのです。その時いくらイエス様に

「ご主人様。ご主人様。開けて下さい」

と頼んでも、神様が閉められた戸は、もう開けることは出来ません。イエス様は中から、

「はっきり言うておく。私はおまえたちを知らない」

とお答えになるのです。

イエス様は、マタイ7章21節～23節で、

「わたしに向かって、

『主よ、主よ』

と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には、大勢の者が、わたしに、

『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、聖名によって悪霊を追い出し、聖名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』

と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。

『あなたたちのことは全然知らない。

不法を働く者ども、わたしから、離れ去れ』

と言っておられます。

生ける信仰は、

『聖霊によって、今、イエス様に繋がっている』

ことです。そのためには、何時も再臨のイエス様にお会いするところに、心の目、信仰の目を注いでいることです。そこが信仰の焦点です。何時主はお出でになるのか、神様がお決めになります。13節に、

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」

とイエス様は言うておられます。

『目を覚ましている』

と言うことは、

『イエス様の再臨を信じ、何時も贖い主であるイエス様に、全信頼して、イエス様の前に生きる』

と言う事に尽きます。時に信仰に疲れ、眠っても、イエス様に委ね、イエス様の御手の中で眠ればよいのです。

私達も、イエス様が見つめておられる所を、見つめる事が出来ますように、これからの人生にも、サタンの妨害はやってきます。どんな試練の中を通って行かなければならないのか、分かりませんが、イエス様は、必ず再臨される事を信じ、イエス様に全信頼し、天の宴席に連なる日を望み見て、聖霊を求め、助けられつつ、地上の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

イエス・キリストの尊い御救いを頂きながら、再臨されるイエス様から目を離し、この世の様々なものに、心奪われ、信仰の目を眠らせてしまっている罪をお赦し下さい。

聖日毎に、再臨されるイエス様を見つめ、やがての日には、天国の宴席に着かせて頂くことに、信仰の焦点を合わせ、常に聖霊に満たされて地上の旅路を歩み抜かせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。